

一般研究報告 I（自由報告）への「ゆるやかなセレクション」の導入について

2011年4月20日
研究活動委員会委員長

学会ニュース 202号でお知らせした通り、3月6日の理事会による承認を踏まえて、2011年度大会から一般研究報告 I（自由報告）に「ゆるやかなセレクション」を導入します。セレクションの導入にあたって、研究活動委員会では、委員会全体およびワーキンググループで慎重に検討を重ね、3月5日の委員会で方針を決定しました。本件について、会員各位によりよくご理解いただくために、学会ニュース記事に加えて「検討経過概要」を追加し、「セレクションの判断基準」にも補筆し、追加説明といたします。

【1】検討経過概要

今期研究活動委員会では、前期委員会の問題提起を踏まえて、本学会大会の現状と問題点についてあらためてさまざまな視点から検討してきた。そのなかで、多様な報告が開かれた大会であることは優れた伝統であるとしても、クオリティの点で問題のある報告が散見されること、報告数が多くなり会場確保が容易でなくなっていること、報告が査読付きとならないため個々の業績としても大会全体としても他の学問分野と比較したときに、評価が低くなる傾向があることが問題点として指摘された。他学会の事例も参照しつつ検討した結果、これらの問題点に対処するためには、多様性へと開かれた大会であることを堅持しつつも、セレクションの要素を一定程度導入することが必要であるとの結論に達した。

当初、過渡的な措置として、研究活動委員をコーディネーターとするテーマセッションを設立し、セレクションの要素を実質的に拡張することも検討した。しかし、本学会大会のテーマセッションは、セレクションがコーディネーターによって実質的に行われてきたとしても、その基準はクオリティよりも、むしろテーマに置かれてきた。研究活動委員会では、こうした点を考慮すると、上の措置は過渡的なものとしても必ずしも適当ではないと判断し、大きな変更とはなるが、一般研究報告 I（自由報告）にセレクションを導入することが適当であるとのコンセンサスに達した。

その際、セレクションといっても、特に優れたものを選び出すということではなく、学会発表としてミニマムの水準に達しないものを除外すること、その意味で、「ゆるやかなセレクション」とすることに重点を置くこととした。

セレクションを通らなかった報告申込について、ポスターセッションでの報告を認めることも検討したが、そのような措置は一般研究報告 I とポスターセッションの間に序列関係を設定するという含意を帰結することになり、その点についての議論は熟していないことから、当面、そのような措置はとらないこととした。また、これまでなされてきた「報告原稿」の提出は、報告数の抑制を目的の一つとして導入されたという経緯があったが、

今回のセレクションの導入によりその意味での役割は終えたものと判断されること、さらに大会当日に多くの報告者はより詳しい報告資料を配付しているという実態があることから、この際、廃止することとした。

【2】セレクション導入の理由

- ①学会発表として備えるべきミニマムの基準を定め、発表のクオリティの向上を目指す。
- ②近年、報告総数が非常に多くなり、会場の確保など、大会運営が容易でなくなっている。報告総数を適正規模に保つための工夫が必要になっている。
- ③他分野の国内学会や国際学会のあり方と対比した場合、社会学会大会全体に対する評価の向上のためには、セレクションがあることが望ましい。
- ④セレクションの導入により、各人の業績表示において「査読付き学会発表」とすることができる。

【3】セレクションの方法

- ①「一般研究報告Ⅰ（自由報告）」のみを対象にする。
- ②学会発表として、あまりにもふさわしくない報告を断ることを主眼とするので、90%以上の申し込みは、従来通り受付可能であろうと予想している。そのような意味で「ゆるやかなセレクション」である。
- ③提出された「報告要旨」の内容を、複数の研究活動委員が査読し検討の上、採否は研究活動委員会が判断する。
- ④「ゆるやかなセレクション」の導入と同時に、従来提出を求めていた「報告原稿」の提出は不要にする。
- ⑤セレクションにより不採択となった報告については、個人に直接連絡する。採択された報告者は、ホームページで一括公開する（6月末ごろ）。
- ⑥セレクションで不採択になったものをポスターセッションで報告することを認めることはしない。

【4】セレクションの判断基準

以下の諸基準によって「報告要旨」に記載されている内容の適否を判断する。

- ①テーマ設定が明確であること
- ②設定されたテーマが社会学に関連するものであること（設定されたテーマが既存の社会学に関連することを要求するものではありません。社会学の領域が常に伸縮していることを踏まえて、「関連」は幅広く包摂的に判断します。また、社会学との関連が明らかであるかぎり、哲学など社会学以外のディシプリンに依拠しつつ設定されたテーマを排除するものではありません。）
- ③学術的研究にもとづく発表であること

④主要な論点あるいは結論が明示されていること（結論の明示まで至っていない場合でも、主要な論点が明示されていれば可とします。）